

Eureka IX

六年制通信 No.36 令和4年2月25日(金)号

引きつける人

これまで多くの魅力ある人に出会ってきたように思います。実際には会わなくても本の中(の架空の人)や歴史上の人物を含めると、さてどのくらいいるのかな。君たちも魅力を感じる人にたくさん出会ってきましたか。

自分の能力では及びもつかない偉業、それはスポーツでも何でもいいのですが、そういう業績を残す人には一般に魅力を感じます。私も野球の大谷選手や将棋の藤井五冠に魅力を感じます。しかし、そういうずば抜けた能力を持っていなくても、魅力的な人柄を持った人がいますね。君たちはどんな人柄に魅力を感じますか。優しい人、親切な人、温和人、不器用だけど懸命に努力している人、いくつか考えられそうですね。

私も最近いろいろと若いころを思い出したりして、どんな人に魅力を感じてきたのだろうと整理して考えてみました。この場合の魅力とは業績ではなくその人の考え方とか生き方のことです、念のため。私の場合、今思いつくのは大体三通りですかね。三つとも兼ね備えている人もいますが、どれか一つでも当てはまるとその人に引きつけられます。ちなみにどんな人に魅力を感じるかに、その人の個性が出ます。

一つは「私」がなく一直線に「公」に尽くした人です。過去形で書いたのは、こういう人は現在進行形で知っているわけではなく大体歴史上の人だからです。

一つは忍耐強い人。これはちょっと解説が必要です。ただ我慢強い人というわけではありません。「世の中は思い通りにはいかない」ということをよく理解している人という意味です。こういう人は常に穏やかでいられます。苦しいことに慣れているわけです、というか、苦しいことが当たり前と悟っているわけですね。自分の心ですら思い通りにコントロールできないのに、他人が自分の思い通りになるわけがない、こんな当たり前のことを実は多くの人が忘れていています。そしてそのことに悩んでいるのですね。現代人は特にそうです。仏教では「一切皆苦(いっさいかいく)」と言いますが、全てのことは苦しいという意味ではなく世の中のすべては思い通りにいかないという意味です。私、小さい時に冷凍庫つきの冷蔵庫がほしかった記憶があります。氷がほしかったのです。粉末のジュースというのがありまして、これを水に溶かして飲むのですが、夏に氷なしの水道水ないしは井戸水(まだこちらの方が冷たいけど)では美味しくないので。この「粉ジュース」を実際に飲んだのは昭和30年代が限界ではないでしょうか。「三丁目の夕日」という映画の時代です。当時私はラジオやテレビもほしかったし、母親は掃除機や洗濯機(乾燥機つきの洗濯機はまだなかったと思います)、父親は車、家族全員ではクーラーを切望していました。今、それらは当時の何倍も高性能と

なっていて、その全てを私は持っています。物欲という点では、ちょっと考えてみても今差し当たってほしいものは何もありません。贅沢なものを持っているわけではないのですが、あの頃有難かったものが今は当たり前になっていることは事実です。ですから「一切皆苦」はあの頃、多くの有難いを知っていた頃の方が身にしみてわかったことでしょう。現代人は当たり前が多すぎて、思い通りにならないと我慢できなくなっている、そんな気がします。毎日のように悲惨な事件の報道がありますが、ほんの少しの不満に対する過剰なリアクションが目につきます。そんな時代だからこそ「一切皆苦」をよく理解している人に魅力を感じるのだと思います。

最後に「持戒」のある人。自戒を込めて言うけれど…の自戒ではありません。戒律というのは生きていく上でのルールのようなものですね。人を殺めてはならない、盗んではならない、そんなルールです。「持戒」というのは、自分だけの戒律を持つということです。仏様でも神様でもいいのです。こういう時は必ず〇〇します、とか私は絶対に〇〇しません、とか自分だけの約束事を誓うこと、それを私は持戒と解釈しています。「破戒は無戒に勝る」という言葉があります。例えば、私にはちょっと無理な持戒ですが、神様に「嘘をつかない」と約束したとしましょう。自分に課した戒めですから必死で守ろうとします。ですが、当然守り切れない場面に遭遇します。破戒ですね。しかし自分が破戒したことを自覚するのと、そもそもその自覚すらないのでは全く違うと思うのです。無戒の人に反省はありませんものね。長い人生を、何かしら自分を遥かに超える存在に対して「〇〇をする」とか「〇〇をしない」とか、そういう約束をして生きている人は、絶対に謙虚でいられるはずです。きっと、だから魅力を感じるのだと思います。さて、皆さんはどういう人に魅力を感じますか。

今週のおすすめ

・森下典子 『青嵐の庭にすわる「日日是好日」物語』 (文藝春秋)

先週号で紹介した『日日是好日』に映画化の話が持ち上がります。以前もあつたらしいのですが、その時はうまくいかなかったらしい。それで今回も全く期待していなかったところ、本決まりに。しかも筆者の役が黒木華さん。いとこ役が多部未華子さん。師匠役には樹木希林さん。これ、なかなかのキャスティングですね。ですが、誰一人茶道を「さ」の字もご存じないと。この本には映画の話が持ち上がるころから完成まで、さらにその後のエピソードも書かれています。

私、映画も観ました。前に「舟を編む」を観て、役者さんて凄いと感心しましたが、今回も大したものだと思います。役者さんは真似をするのが極端に得意なのだそうで、彼ら(彼女ら)の空間把握能力は飛び抜けているそうです。ですから、お茶の作法もすぐ覚えるらしい(ただしそのシーンが終わればすぐ忘れるそうです)。

稽古場に掛けられた扁額の「日日是好日」を書いたのが、樹木さん紹介の小学校5年生の女の子だとか、こういうのは本を読まないと永遠にわかりませんね。映画の最後の方に筆者がお点前を披露するシーンがありますが、これも本に書いてあることです。

BGMは坂本九の「明日があるさ」でした…。